令和元年１０月１５日
高校ＷＧ（第４回）
参考資料１

新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ（第３回）意見概要

○　複線型の教育制度というのは、日本の今の単線型の教育に足りないものであり、複線型と単線型の融合化を図ることが重要。

○　校長として２～３年しか学校に関わることができないのであれば、例えば、教頭等の別のポジションで長期的に学校に関わってもらうという方法も考えられるのではないか。

○　高校生の多様な資質・能力を評価することにつながるような、様々な評価の開発を進めることが必要。特に探求については、ペーパー試験では測れないものであり、この評価の在り方についてしっかり取り組む必要がある。

○　これからAI時代に子どもたちに必要なものとしては、創造性と社会性である。あらゆる分野において創造性が必要だと考えられるので、そういう学びの基礎を高校のときに身につけることができたら良いと思う。また、それに加えて、多様性の中での協同性をいかに見出していけるかについても考えていく必要がある。

○　定時制課程には、外国にルーツを持つ生徒の割合が大きく、そういった環境において、１クラス４０人配置は多いと感じる。定時制課程における教員定数の在り方など考えていく必要がある。

○　日本語が全くできない外国人生徒をどう教育していくのかについては今後の課題であると認識。また、定時制課程に進学を希望している外国人生徒は在留資格が得られないという問題があるので、他省庁とも連携した対応策の検討が必要ではないか。

○　教員の超過勤務の実態として、部活動指導がかなり占める中で、部活動を学校内だけで抱え込むのではなく、地域社会と連携・協働しながら、部活動の在り方について検討していくことが重要。

○　Society5.0という時代を見据えたときに、通信制課程というのは新しい学びとか高校教育の可能性を開いていくポテンシャルを秘めた部分もあるのではないか。通信制課程においては、例えば、個別最適化された学び、遠隔、ICT の活用等、非常にイノベーティブな動きが生まれつつあると感じている。通信制課程の質の確保・向上という議論に加え、通信制課程の持つポテンシャルについても焦点を当てていくことが必要。

○　外国にルーツを持つ生徒、不登校経験を持つ生徒、あるいは中途退学者など、特別な支援を要する生徒への支援や対応については、学校だけで抱え込まず、学校外の関係機関や外部人材との連携や活用が重要である。

○　ICT の技術の活用による授業改革は、全日制、定時制、通信制の全てに共通して重要。しかし、Society5.0 を生きる上で必要となる力を生徒に身に付けさせるためには、最後には教員の役割が重要となってくる。

○　広域通信制高等学校が設置しているサポート校における教育の質の担保について、文科省はガイドラインの策定や点検調査を実施しているが、サポート校における生徒の学びが本当に求められた質を確保できているものなのか危惧している。